

審査の結果の要旨

氏名 辻 直人

本研究は、明治期以来130年余にわたる文部省派遣海外留学制度についての歴史研究である。従来留学史の研究は、ほとんどが幕末・明治期までを対象とし、人物研究、高等教育制度形成史などいくつかの視点に分散したままでおこなわれており、通史的、総合的な留学制度研究は極めて乏しかった。本研究はこのような問題認識に立って、近代日本の留学制度の基幹となった文部省留学制度の最初の大きな転換期を提示し、その検証をおこなったものである。すなわち文化的な落差が大きいために欧米に一方的に学びに行く形であった幕末以来の「留学」が、呼称が「在外研究員」へと変化することが象徴するように、相互交流を含む形に変化するようになったのはいつか、その要因は何か、の論証を試みたものである。

まず第一部において、1875年から1940年まで65年にわたる毎年の留学生『一覧』(冊子)等を用い、3180人の留学生について所属学校、留学先、専攻分野、留学前後のポストなどの詳細なデータベースを作成した。このデータベースを分析の結果、1920年頃には留学に質的な変化があったのではないかとの仮説を提示する。すなわち帝国大学の教員候補者を派遣して帰国後大学に迎えるという役割を果たしていた文部省留学制度は、1900年代以降は専門学校、高等師範学校、高等学校などに広がり、ポストの移動の仕方にも変化がみられることなどをその根拠とする。第二部では上記の仮説を検証するため、旧帝国大学史料などを使用して、選抜の仕方の変化、新設の帝大における留学の役割などを考察し、さらに時代とともに形を変えつつ留学が直轄諸学校全体へと拡大していく過程を明らかにした。第三部では、第一次世界大戦期に留学先がドイツ中心からアメリカに移行し、その経験を一つの「てこ」として相互交流型の留学が姿を現してくる過程を明らかにした。大戦後再び留学先としてのドイツが復活するが、相互交流的な在外研究への動きは、ドイツ、フランスとの間にもみられるようになるという。

本研究の成果としては、個々の留学生についてのデータベースを土台に通史的、数量的な留学生派遣の概観を得た点、従来先行研究の考察が大学からの派遣にとどまっていたのに対し初めて高等学校や諸学校の留学を検討した点、1920-30年代の留学制度上の質的变化とその背景を仮説的に提示した点などがあげられる。また多くの新史料の発見も評価に値する。他方、この問題はグローバルな文化交流史の問題等多様な視角からのアプローチとの接点があり、その点に課題があるとの指摘がなされたが、それらは本研究のメリットを損なうものではないと判断された。これらを踏まえ、留学史という視点からの研究が確立していない日本教育史研究における、通史的研究の先駆的な業績として、本研究は博士(教育学)の学位にふさわしいものと判断された。